

第 61 号

令和 7 年 7 月 1 日 発行

自 重

出雲大社北島國造館

出雲教

HP



0853-53-2525

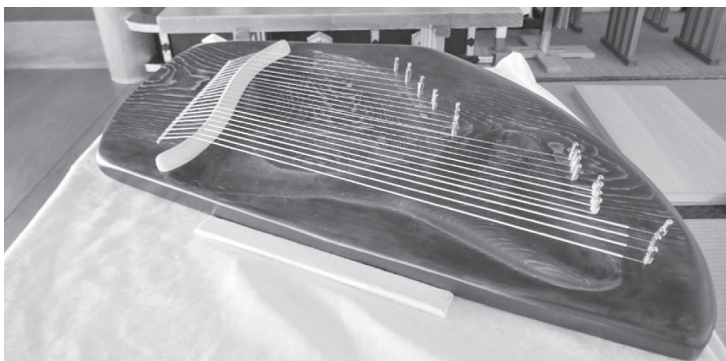
出雲市大社町杵築東194

奉納
弦楽器

「ライアー」

境内古材で制作

(詳細四面)



「隠徳」

出雲國造

北島 建孝

中国の思想家孟子は「人は本来善である。しかし、生まれ持った善は努力しなければ開花せず、怠ると悪にもなる」と、いわゆる「性善説」を説いた。これに対し荀子は「人は本来悪である。しかし、後天的に礼節などを身に着け、悪の本性を矯正することによって社会的秩序を維持できる」と、「性悪説」を説いた。私はこれを学校の授業で習った。どちらも一理あると思ったのだが、個人的には性善説が正しいと思った。爾来それは変わることが無かったのだが、最近迷っている。善と悪とは何かがわからなくなってきたのだ。

善は正しいことであり万人誰しもが善いとするものだと思うが、そんなものが果たしてこの世にあるのだろうか。例えば「人殺しは善くない」誰もがそうだと思うのだが、戦争になると見ず知らずの人間の大量の殺戮が起こる。それは自国、自分達を守る為には正しい、つまり善い行いとなる。

「嘘をつくことは良くない」しかし相手のことを慮ってつく嘘があることは誰しも経験があり、理解できることだ。「泥棒は良くない」しかし、ねずみ小僧のように獄門に処せられた者でも義賊として称賛する者もいる。つまりは自分にとって、或いは自分達にとつて善いことが善で、悪いことは悪なのだ。当然、相対する人達にとつては、これが反対になる。性善説も性悪説も育った環境に依る所が大きいとしているが、つまりは善いしろ、悪にしろ本来備わっているものではなく、育って行く過程で備わるものであるとは考えられないだろう。

過日東京で財布を落とした。現金、クレジットカード、運転免許証等が入っていた。ほとんど諦めていたのだが、奇跡的にもちゃんと戻ってきた。全く手を付けられなかった様子もなく、現金もカードも免許証もそのまま戻ってきた。心底拾ってくれた人に感謝した。外国だったら先ず戻らないとよく耳にしていたので、日本は素晴らしい国だとしみじみ思った。

顧みて自分が拾う立場ならどうするだろう。今の自分なら届ける

だろうが、貯えもなくその日暮らしのような生活、又、濡れ手に粟的なことばかり考えていたのなら、恐らくネコババすると思う。でもそんなことをすると一生良心が咎めるだろうし、ネコババした事実は忘れることができないかもしれない。

思い出したのが出雲教の教えの一つ、隠徳である。三勤の一つに「常に神明の照覽を畏みて隠徳を積むこと」とある。神様がいつも見ていらつしやるから誰も見ていなくても悪事を働いたり、怠けたりしてはいけない。「天知る地知る」「神はお見通し」的なことの言い換えで、「陰ひなた無く徳を積む行いをしよう」というくらいの解釈が妥当だと思う。しかし私は「目に見えない、心、胸の内での善いこと、人の為になることを考えなさい」との教えもあると考えている。人は普段考えていることが行動の基となっているはずだから、いわゆる徳だとか善い考えを自分の内に積むことこそが大切ではないかと思う。人を騙して自分に利することばかり考える人が信を失うように、自己は抑えても人の為に尽くすことを考える人に信が集まるように、常に他人からは見えない胸の内を磨きたい。己の中にある善も悪も認めながら良き社会人となりたいものだ。

今年の夏も猛暑が予想される。皆様のご自愛、ご健勝を心よりお祈りします。

「しまなみの杜リゾート」

入社式奉告祭

株式会社今治冠婚葬祭互助会グループ
しまなみの杜リゾート 支配人 伊藤 雅史

去る四月二日に、愛媛県今治市のしまなみの杜リゾートにおいて、出雲教総務・北島大孝様齋主のもと、株式会社今治冠婚葬祭互助会グループ新入社員入社式奉告祭が執り行われました。このお社は、昭和四十五年十二月に今治市内に結婚式場「寿楽」をオープンした際、初代会長の青野久吉が、直接北島國造館に足を運び、出雲大神様の御分霊をいただいて建てたものです。それ以来、五十五年の長きに渡り、出雲大神様のお見守りのもと、数多くの神前式を執り行うことができました。これは大神様のお陰によるものと感謝しております。また、北島國造家主宰の出雲教様と長くお付き合いをさせていただいておりますことも感謝しております。このようなご縁をいただいたのは、当社にとって大変誇り深いことであり、信仰のつながりが当社の重要な支えとなっております。

入社式奉告祭の当日は快晴に恵まれ、清々しい空気の中、新入社員九名が晴れやかに、この特別な日を迎えることができました。



した。更に当社の会長、社長および幹部社員も参列し、新たな仲間を迎える喜びを共有すると共に、これからの会社の発展を誓い合う場となりました。新入社員の皆様には、社会の一員として使命感を持ち、今治冠婚葬祭グループの一員として共に歩む姿勢が期待されています。

今後とも出雲教の皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

特集

山王社「神札版本」発見さる!

去る令和六年十月三十一日に正遷宮がおこなわれた山王社。北島國造家の表鬼門(艮「うしとら」≡北東の方角)の鎮守社として古くから崇敬されていましたが、此度この山王社の神札を刷るための「版本」が発見されました。版本は二種類あり、ひとつは長さ二十一・五センチ、幅九センチ、御神像の上部に「山王宮大神」「悪病退散」「家内安全」の字が見て取れます。もうひとつは長さ二十五・三センチ、幅四・三センチ、「山王神社方災消除守護」とあり、また版本の裏面には「大正十三年五月新調」との記録がありました。

山王社については『杵築大社近郷絵図』にそれらしい小社が描かれており、現出雲大社御本殿の裏、素鷲社から御文庫あたりにかけて建てられていた出雲國造邸の鬼門鎮護のお社として祀られていたようです。山王社の例祭は陰暦六月十五日ですが、かつては十四日・十五日の二日間にかけて行われていたとの記録が残っています。江戸時代中期にはこの祭日に富籤の興行があ

り、また元の御社跡である山王台への神輿渡御の神事や、神歌の余興などが行われ、参道には露店が並ぶ大変な賑わいだったと伝えられます。

今回の遷宮に伴い、山王社への石段を整備し、新たに手摺を設けました。皆様の御参りをお待ちしております。

○発見された神札版本(二種類)



山王神社方災消除守護



連載「大神様のおかげ」③

広島県出雲教篤信者

亀井 史聖

河内神社の宮司となり、大神様のお導きで妻子に恵まれた私の父は、日中は生業の提燈の製作に励む一方、朝夕は身を清めて神前に地域の安寧と発展を祈り、また祈願者があれば祈祷をするという毎日を通してきました。母は神様の託宣を聞く巫女としての役割も果たしていました。こうして夫婦が力を合わせて祭祀に勤しむ日々を送る中で、私は亀井家三男として生を授かりました。

物心ついてより、今でも鮮明に心に残っていることが三つあります。

一つ、毎朝父が神殿で叩く太鼓の音で目覚めていたこと。装束姿で祝詞を奏する父が神様かと思うほど神々しく見えたのを覚えています。

二つ、私が誕生した年に町の赤ちゃんコンクールがあり、参加者百五十人中、私が健康最優良児として表彰され、更にその翌年に行なわれた郡西部六ヶ町村優良大会でも代表の参加者二十人中、健康最優良児として表彰されたこと。この結果も手伝ってか、縁結びの出雲大神様の御加護で結ばれ

た亀井家に、今度は「大神様のご神童様がお現われになった」と大評判となり、「一目ご神童様を拝ませて頂きたい」と、毎日多数お参りされるようになったそうです。三つ、大神様のご加護が大評判となり、そのお蔭で父の祈祷も繁忙を極めるほど参拝者が増えたこと。

このような事もあり、父は大神様への心を益々篤くし、毎日の朝拝・夕拝で欠かさず感謝の誠を捧げていました。こうした父の思いが通じたのでしょうか。ある日突然、出雲教総本院の江角甚市先生のご案内により、北島國造家第七十八世・北島貴孝様（よしのり）がご来臨される事となりました。

國造様は二日間にわたって我が家にお泊りになり、神職として父のなす神事をつぶさにご覧にされました。また祝詞の書き方についても幾つかを父に書かせてお調べになられたそうですが、大変ご満足いただいたそうです。ご来臨の記念に國造様が正装として着用された「袍（うえのきぬ）」と「冠」をご恵贈賜りました。父の存命中、大きなお祭りを奉仕する際に着用したようですが、現在は我が亀井家の家宝として大切に保存しています。

『自重』六十二号に続く

「ライアー奉納と演奏」

酉の星宮 森 則子



令和七年三月三十日、ライアーの奉納と演奏をさせて頂きました。春雪舞う中演奏が始まり、演奏後には晴天という印象的な一日となりました。

令和三年一月十四日新月、お参りしなければ：という思いに駆られ参拝してみると、浜からの風により御三社前のもみの木が倒れていました。

私は十一年前にドイツの木でライアーという弦楽器を作っており、丁度一年ほど前から地元の木でライアーを作り始めた頃でした。

その日、偶然立ち寄った松井銘木様でその話をしたところ、國造様に許可をいただき、もみの木を分けていただく運びとなりました。まさに神計らしいです。木は傷みが激しく使えるところは無いと言われていましたが、奇跡的に一部だけ生きていて美しい木目が白く輝きを放っていたことを今でも鮮明に覚えています。もみの木の美しさに魅了され、製材をお願いし自然乾燥していただくことになりました。

四年の年月が流れ、もみの木のライアー制作に取り掛かりました。年月が経っても尚、あの頃の輝きは失せることなく畏れ多く感じました。私の中にも気負いが湧く中、宇宙意識の音、シンプルなデザイン、拭漆（ふきうるし）という伝統技法で作る気持ちが高まりました。制作期間一カ月という短期間でしたが、ノミで彫る、磨くなどの作業に三十名の方々が携わって下さいました。

四年前に倒れたもみの木が皆様の手でライアーとして生まれ変わり、祝福の音を奏で合えたのもひとえに皆様のご尽力の賜物と感謝しております。ありがとうございます。

令和七年祭典・行事（七月～十二月）

七月	九日（水）	山王社祭 （旧六月十五日）
八月	四日（月）	天満宮祭・天神社祭
九月	七日（日）	重陽の節句祭 九月二十一日（日） 献茶式（亀山茶会）
十一月	十五日（土）	紐落式日
十一月	二十三日（日）	新嘗祭・御種祭
十二月	四日（木）	龍神講祭 （旧十月十五日）
十二月	十五日（月）	謝恩祭
十二月	三十一日（水）	大祓式・大晦日祭